

【1.体制】

薬剤師定数7名・事務2名のところ、下記体制で今年度活動。薬剤師常勤換算5.5名（産休1名、時短1名、パート1名）と、薬局事務2.6名体制（栄養管理室より支援あり）でスタート。

上半期に薬剤師1名退職、1名産休のため、下半期は薬剤師常勤換算3.7名と非常に厳しい体制であった。そのため、下半期（半年間）の週1回、外来患者の多い木曜日に済生会熊本病院より薬剤師1名（総勢24名）の派遣をお願いし、外来業務を支援頂いた。

【2.取組内容と実績】

【薬局理念】

- ・患者さんを第一に考えた、安心・安全で良質な薬物療法の提供に努めます。

【基本方針】

- ・医療チームの一員として他職種と連携をはかり、医薬品の適正使用を推進します。
- ・向上心を持って自己研鑽に励み、より専門性の高い薬剤師を目指します。
- ・教育・研修を推進し、人として、医療人として暖かみのあるスタッフ育成に努めます。

1. 外来業務

99%院内処方。勤務できる薬剤師が限られる中、事務スタッフの増員、熊本病院からの支援もあり、アドヒアランス向上を目的とする薬剤管理指導をどうにか継続することができた。また、外来患者への薬剤管理指導内容のカルテ記録も徹底し、薬剤師間および院内スタッフとの情報共有に努め、医薬品の適正使用も推進できた。ジェネリック医薬品への切り替えも積極的に行い、一包化調剤や、残薬調整についても断ること無く業務遂行し、服薬コンプライアンス向上、医療資源の有効活用、および患者さんの負担軽減にも大いに貢献できたものとする。

	2024年度	2023年度	2022年度
一包化調剤（外来）	2,192件	2,224件	2,206件
後発医薬品使用割合	92.1%	87.3%	87.6%

2. 病棟業務

いつにも増して病棟業務への時間が限られる中、ベッドサイドへの訪問、医師・看護師をはじめ病棟スタッフとの連携も行いながら、ポリファーマシーの改善をはじめ、医薬品の適正使用に努めた。医師の負担軽減のためのPBPM（プロトコールに基づく薬物治療管理）の推進にも取り組み、積極的に処方支援、変更提案などを行った。これまで土日・祝日も勤務を行っていたが、下半期は薬剤師の体制上、土曜日を薬剤師不在日とせざるを得ず、看護師スタッフには迷惑をかけてしまった。一方で、薬局事務へのタスクシフトとして、持

参薬鑑別報告書の作成支援や、ストック薬管理、医薬品の病棟への配送などを担ってもらうことで、薬剤師の負担軽減、看護師の負担軽減にも繋がり、協働を推進できた。

	2024年度	2023年度	2022年度
持参薬鑑別	972件	920件	838件

3. 無菌調製

1年を通して入院・外来を問わず、全ての抗がん剤の無菌調製を行うことができた。

	2024年度	2023年度	2022年度
無菌調製			
抗がん剤	61件	48件	67件

4. 人材育成と連携・協働

少人数の限られたスタッフで各種業務を遂行していくことは苦労も多く、非常に大変ではあったが、その反面いろんなことに関わらざるを得ない状況で、自然と経験を積み重ねることができ、若手をはじめ皆が成長できた1年であったと感じている。薬局が目指している、ゼネラリストとしての幅広い知識や技量を磨いていくことにも繋がっている。特に下半期は、業務支援派遣による済生会熊本病院の若手薬剤師との交流もでき、さらなる連携強化に繋がっている。2024年度も、連携・協働の重要性を再確認し、人と時間を効率的に活用できるよう取り組むことができた。

5. 医薬品在庫管理および情報提供

2024年度も後発医薬品への切替えを推進し「後発医薬品使用割合90%以上」を達成できた。また、高額医薬品の適正管理や期限切れ医薬品の削減、包括病棟におけるコスト管理等々、経営面に貢献すべく取り組んだ。医薬品情報データベースを活用したD I ニュース、看護師向け情報、安全性情報等の発信、情報の共有化・一元化をはじめ、医薬品検索データベースや、退院時情報提供管理データベースなど、活用しやすいデータベースの構築に努めた。

【3.今後の課題】

2025年度は、育休薬剤師2名が復職するため、これまで制約の多かった病棟業務に力を注ぎ、看護師の負担軽減をはじめ、医薬品の適正使用・安全管理に努めていく。そして、スタッフの健康管理にも留意しながら地域医療の継続・発展のためにも邁進していく。

今後も、「連携」「協働（タスクシフト・シェア）」「医療DX」を念頭に、チームワークで「安心・安全で良質な薬物療法の提供」を継続していく。